中学生における否定的感情に基づく動機付けとストレス反応との関連

○杉山瑞奈（愛知県立豊田南高等学校）・伊與田万実（名古屋学芸大学）・今井正司（名古屋学芸大学）

キーワード：否定的感情に基づく動機付け・能動的注意制御機能・ストレス

目　的

動機付けとは、欲求により行動を起こし目標へ到達する一連の過程であり(宮本, 1981)、ネガティブな感情の方が、ポジティブな感情よりも動機付けを生起しやすいとされている(速水, 2012)。成人を対象にした研究においては、「悔しさがやる気に変わる」や「不安をバネに頑張る」など、否定的な感情に基づいた動機付け（Negative Emotion-based Motivation：NEM）が動機付けの様式として確認されており、中学生においても同様にNEMが確認されている(杉山・今井, 2015)。特に、成人においては、否定的感情に基づく動機付けとストレス反応における心理的要因との関連が示されており、それらの関連性に能動的注意制御機能の作用が影響していることも報告されている（杉山・今井, 2016)。しかしながら、中学生においては、NEM とストレス反応における心理的要因や、能動的注意制御機能の影響性については検討されていない。本研究では、中学生を対象に、NEM とストレス反応における心理的要因との関連を能動的注意制御機能の観点をふまえて検討し、成人との異同について教育臨床的観点より考察することを目的とした。

方　法

調査対象者と手続き

公立中学校の校長と養護教諭に、本研究に関する調査の依頼を行い、了承が得られた中学校において調査を実施した。本調査は「回答は任意であること」「学業成績に影響しないこと」「プライバシーの保護」について口頭および紙面での説明を行った。中学生205名に質問紙調査を実施し、記入漏れや記入ミスのあった回答を除く有効回答者 171 名(平均年齢:13.61 歳, 男性:114 名, 女性:57 名)の回答を分析対象とした。なお、本研究は名古屋学芸大学における研究倫理委員会の審査と承認を得て行われた。また、開示すべき利益相反関係はない。

調査材料

1) Negative Emotion based Motivation Scale for Children(NEMS-C;杉山・今井, 2016)：中学生の否定的感情に基づく動機付けの程度を測定する尺度であり、「悔しさに基づく動機付け」「不安に基づく動機付け」「怒りに基づく動機付け」の3因子で構成されている。
2) Public Health Research Foundation Type Stress Inventory(PSI;坂野・岡安・嶋田, 2007)：中学生のストレス反応を測定する尺度であり、「身体的反応」「抑うつ・不安」「不機嫌・怒り」「無気力」で構成されている。
3) Voluntary Attention Control Scale (VACS；今井・熊野・今井・根建, 2015)：能動的な注意制御スキルを測定する尺度である。

結　果

NEMS-C と PSI において、各尺度全体および下位因子ごとに相関分析を実施した。その結果、「不安に基づく動機付け（NEMS-C)」と「無力感（PSI)」において、有意傾向の負の相関が示されたが(r=-.130, p<.10)、それ以外の変数間においては有意な相関が示されなかった。次に、VACS を制御変数とした偏相関分析を実施した結果、「悔しさに基づく動機付け(NEMS-C)」と「不機嫌・怒り（PSI)」において、有意傾向の正の相関が示された(r=.142, p<.10)。また、「不安に基づく動機付け（NEMS-C)」と「抑うつ・不安（PSI)」において、有意傾向の正の相関が示された(r=.146, p<.10)。さらに、相関分析において示された「不安に基づく動機付け（NEMS-C)」と「無力感（PSI)」において示されていた有意傾向の負の相関は認められなかった(r=-.056, $n.s.$)。

考　察

本研究においては、中学生における NEM とストレス反応との関連について、能動的注意制御機能の観点をふまえた検討を行うことを目的とした。その結果、不安な感情に基づく動機付けと無気力の間に弱い関連が示されたが、概ね、NEM はストレス指標との関連がほとんど示されないことが明らかとなった。能動的注意制御機能を統制した偏相関分析を実施した結果、NEM の下位因子とストレス反応との間に関連が認められるものもあったが、概して弱い関連性であることが示された。これらの結果を概括すると、NEM はストレスに影響を及ぼす動機付けではないということができる。成人を対象とした先行研究においては、「悔しさに基づく動機付け」と特性怒りに関連性があることが示されており、能動的注意制御機能がこれらの関連を減弱させる要因であることが確認されている(杉山・今井, 2016)。しかしながら、中学生においては、成人で示されたような関連性を示す結果は得られなかったことから、中学生と成人における発達的差異が NEM に影響を及ぼしていることが示唆された。今後は、中学から大学における NEM の発達過程を考慮しながら、精神的健康との関連や学校適応などの問題について、実証的に検討する必要がある。

(SUGIYAMA Mizuna, IYODA Mami, & IMAI Shoji)